

界沢（さかいざわ）地区

会津郡と河沼郡との境にあることから名付けられた。また、沢とは「たく」とも呼び、東高久から分かれたことに由来する。界沢西にある工業団地の地は、東高久と呼び約千二百年前、会津郡の下に「郷」があり、その一つ「多具郷」が変化したものである。江戸時代初めの慶長十六年（一六一一）、慶長会津地震によって村が崩壊し、慶長十八年（一六一三）に、界沢と高久に分かれている。

上杉時代、直江兼続の東雲寺

村の北西には、耕新寺があり、天正三年（一五七五）に獨峯が再興している。また、北西の熊野神社附近に、越後国、南魚沼の雲東庵を直江兼続が持ってきた東雲寺と名乗り途中まで寺を建てていた。その後、東雲寺は、直江兼続が慶長六年（一六〇一）に米沢に移封となると、寺も移ったが、『新編会津風土記』に東雲寺会津若松市大戸町上三寄と大町に分かれ移されたが、大町の寺は、戊辰会津戦争で焼失している。

なお、金屋氏は、後に境沢氏と呼ばれ、子孫は慶長六年（一六〇一）に直江兼続に付いて、山形県米沢市へ移っている。境沢氏には、永正十五年（一五二八）、葦名盛滋から境沢常陸介にあてた文書、享禄元年（一五二八）葦名盛舜から境沢左馬助あての、天文十三年（一五四四）葦名盛氏あて、諸公事の免除を示す三通の文書が残っている。

界沢の洪水

湯川は、昭和三十四年の国による湯川放水路が完成するまで、平沢、中地、吉田、界沢地区では洪水が頻繁していた。写真は昭和三十三年七月の界沢地区の洪水のようすである。

この洪水は、湯川だけでなく、阿賀川（大川）、宮川が大氾濫し、会津坂下町では湖のようになった梅雨前線による



洪水である、湯川放水路の工事昭和三十年に始まったばかりで、完成しておらず、湯川下流での水害となった。水害によって、秋には刈り取り後に三把立てした稲が流され、下流の界沢当たりで留まると、稲の奪い合いもあった。

高雲山耕真寺（界沢地区）

曹洞宗。市内東山町正法寺の末寺。本尊は如意輪観音。檀家数四十七戸。

開基の年代は不詳。『新編会津風土記』によると、天正三年（一五七五）獨峯という僧が中興し、天寧寺第七世正元和尚を請じて開山せりという。旧くは天寧寺の末寺だった。村西には、ほかに東雲寺という寺があったが、元禄四年（一六九一）大戸町の大豆田村に移された。この東雲寺は山号を龍澤山と号し村主金屋尾張守の建立と伝えられるが草創の年代は不詳。耕真寺は、天正十七年（一五八九）伊達氏の乱で焼失したという。

熊野神社（界沢地区北村）

氏子数四十六戸、祭礼は九月九日。宮司は神明神社。伊弉諾、伊弉冉加尊（いざなぎ、いざなみのみこと）を祀る。延宝三年（一六七五）紀州熊野より勧請し創建されたと伝えられる。旧社各は村社。昭和三〇年代に火災に遭い再建されている。